

# ヨハネによる福音書 Ⅰ章 Ⅰ～ⅱ節 (1)

「初めに<sup>ことば</sup>言があった。言は神と共にあった。言は神であった」

「言は肉となって、わたしたちの間に・・・」



中二のミユキ

東京の私鉄沿線の小公園で

「うっそー」「えー、ほんと？」しか言わない学校の友だちなんていないと思っている。

先生もさあ、みんなもさあ、マジだけど、本気じゃないんだよ。

人間は、自分たちの無力さが避けがたいものであることに気づいている。

セネカ

前1年(?)～後56年

古代ローマの哲学者

ビリー・ジョエル

1949年～

アメリカのロック歌手、作曲

家

真実であるとは、いつもなんと難しいことか。

誠実とは、なんと寂しい言葉だろう。

誰もがあまりに真実でないから。

嘘がないということ、それは忘れかけられたもの。

だが、それこそ、何よりあなたに願うもの。

(「オネステイー」より)

ナイフの事件をきっかけに「キレル」という言葉がは  
やっているけれど、僕はあれは「切れ」たんじゃなくて、  
つながろうとしてるんだと思う。・・・「キレル」と呼ば  
れる激情は、根太い命の時間につながりたいという衝動  
なんじゃないだろうか。

小栗 康平

おぐり・こうへい

1945年～

映画監督

「眠る男」で国際的賞を受賞

ローレンス・ハウスマン

1865～1959年

イギリスの詩人、作家、版画

家、評論家

光が見下ろすと、闇があった。

光は言った、「私が行きます」

平和が見下ろすと、争いがあった。

平和は言った、「私が行きます」

愛が見下ろすと、憎しみがあった。

愛は言った、「私が行きます」

こうして、光が来て、輝いた。

こうして、平和が来て、安らぎを与えた。

こうして、愛が来て、いのちをもたらした。

こうして、言は肉となり、私たちの間に宿られた。



ブリュエゲル「東方三賢王の礼拝」

その時、人々が急に道をあけた。担架を持った二人の男をつれて、ねずみ色の<sup>にそうふく</sup>尼僧服をきた白人と印度人の若い修道女が老婆に近づいた。彼女たちは老婆にヒンディー語で何かを<sup>ささや</sup>囁き、そのうつろな顔を水でぬらしたガーゼでふいた。

「マザー・テレサの<sup>あま</sup>尼さんたちですよ」

と江波が<sup>えなみ</sup>日本人たちに説明した。

「ご存じでしょう。この町に『死を待つ人の家』を作った修道女たちです。彼女たちはカルクタでああして行き<sup>ゆ</sup>倒<sup>たお</sup>れの男女を探しては、臨終まで世話するんです」

「意味ないな」と三條が<sup>あざけ</sup>嘲った。「そんなことぐらいで、印度に貧しい連中や物乞いはなくならないもの。むなしく滑稽<sup>こっけい</sup>にみえますよ」

滑稽という言葉が美津子に大津のみじめな半生を思い出させた。三條の言うように、大津がヴァーラーナシの町で、<sup>ひんし</sup>瀕死の老人や老婆を無料宿泊所や河の火葬場に運んでも、それはどのくらい役にたつのだろう。それなのにこの修道女や大津は・・・

「わたくし日本人です」

と美津子は白人の修道女に話しかけた。

「何のために、そんなことを、なさっているのですか」

「え」

修道女はびっくりしたように<sup>あお</sup>碧い眼を大きくあけて美津子を見つめた。

「何のために、そんなことを、なさっているのですか」

すると修道女の眼に驚きがうかび、ゆっくり答えた。

「それしか・・・この世界で信じられるものがありませんもの。わたしたちは」

それしか、と言ったのか、その人しかと言ったのか、美津子にはよく聞きとれなかった。その人と言ったのなら、それは大津の「玉ねぎ [イエス]」のことなのだ。

(『深い河』より)

## 遠藤 周作

えんどう・しゅうさく

1923～1996年、カトリックの信徒、作家



そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。

(イザヤ書 55章11節)

父のふところにいるひとり子である神、この方が神を示されたのである。(18)